はととりんご

小川未明

青空文庫

二人の少年が、竹刀をこわきに抱えて、話しながら歩いてきました。

「新ちゃん、僕は、お小手がうまいのだぜ。」

「ふうん、僕は、お胴だよ。」

「お面は、なかなかはいらないね。」

「どうしても、背の高いものがとくさ。正ちゃん、いつか仕合してみない。」

新吉は、お友だちの顔を見て、にっこりと笑いました。

「まだ、君と、やったことがないね。だが、新ちゃんを負かすと、かわいそうだからな。」

「だれが、正ちゃんに負けるものか。」

新吉は、自信ありげに肩をそびやかして、前方をにらみました。

「僕は、新ちゃんに負けない。」

「僕も、正ちゃんに負けない。」

二人は、道の上で、竹刀を振りまわしながら、仕合のまねごとを始めたのです。

「お小手。」

「お面。」

「おや、あぶのうございますよ。」

ふいに、どこかのおばさんが声をかけました。おばさんは、道の端の方へ体をさけていました。

「新ちゃん、あぶないからよそうや。」と、正二がいいました。

「ああ、よそう。」

二人は、往来で、こんなことをしてはよくないことに気がついて、ふたたびおとなしく、肩を並べて歩いていました。さっきのおばさんは、いきかけてから、ちょっと立ち止まって、振り向いて笑いました。

「正ちゃん、僕のはと、ねこにとられてしまった。」

「えっ、とられた。」

「どらねこがとったのだよ。君、知らない。尾の長い三毛ねこだ。はとが遊びから帰って、箱のトラップへはいるのを見ていたのだね。後からついてはいって、二羽とも食べてしまったのさ。出ようとしても、トラップの口があかないだろう。ねこのやつ、箱の中でじっとして、目を細くして眠っていたのだよ。」

「悪いやつだね。それからどうした。」

正ちゃんは、足を止めて、新ちゃんの顔を見ました。

「僕、どうしてやろうかと思って、おねえさんを呼んだのさ。おねえさんも二階へ上がってきて、『悪いねこだから、ひどいめにあわせておやり。』というから、僕、太いステッキを持ってきて、なぐろうと思ったのさ。箱の中から引き出そうとしても、お腹が大きくて、トラップの口から出そうもないのだよ。」

新吉は、そのときのことを思い出して、息をはずませました。

「なぐった。」

「だって、箱の中へはいっているのだろう。上からなぐれないし、僕、困ったのだよ。」

「ねこは、どうしていた。」

「悪いやつだね、目を細くして、知らないふうをしているのさ。」

「あばれなかったの。ははは、だまそうと思ったのだね。」と、正ちゃんが笑いました。

「じっとしているから、おねえさんに箱のふたをはずしてもらって、僕が、なぐってやろうとしたのだ。」

「なぐった。」

新吉は、ねえさんが注意しながら、ふたをはずしたのを思い出しました。そのとき、ねこはあまえるようにして、体をねえさんにこすりつけたので、自分は、振り上げた手をどうしようかと、ちょっとためらった瞬間に、ねこが矢のように逃げ出したので、はっと思って、すぐなぐったが、ただ、はげしく、ステッキが地面を打っただけでありました。

「打ちそこねて、おしいことをしたのさ。」

「だめだな、新ちゃんは、そんなの打てなくてどうするのだい。僕なら、きっと、たたき殺してやったのに。」

正二は、今度、仕合をしても、自分は、じゅうぶん勝てる、といわぬばかりの調子でありました。

「僕、あんなやさしいねこの姿を見なければ打てたのさ。」

日ごろ、犬やねこをかわいがる新吉は、まったく、そのとき、手もとがくるったのであります。

「だめだなあ、敵を討つとき、かわいそうもなんにもないだろう。」と、正二がいいました。正二のいったことは、たしかに、新吉を深く考えさせました。

「だが、ねこは、鳥をとるのを悪いと思っていないだろう。」

「君、はとのほうが、よっぽどかわいそうだろう。」

「それは、そうだ。」

「みたまえ、箱の中はどんなだったい、血だらけでなかった。」

「ああ、血がそこらについて、毛が散らばっていた。」

「それだのに、君は、はとの敵を討つのに、かわいそうだなんて思ったのか。」

正二は、新吉をなじりました。新吉は、じっと下を向いて歩いていました。そして、つくづくと自分の勇気がなかったのを感じ、ねこをなぐらなかったのを後悔しました。

交叉点のところへかかると、まだ、青赤の信号燈がまにあわぬとみえて、ばたんばたんと、ゴーストップの機械をまわして、見張りの巡査がピリッピリッと、そのたびに笛を鳴らしていました。

ばたんと赤が出ると、一方からくる車がみんな止まって、いままで、じっとしていた車が、流れるように続きました。また、ばたんと機械がまわって、ピリッピリッと鳴ると、ゴウッと走ってきた車が急に止まって、止まっていた車が走り出すのです。台の上に立って、ピリッピリッと笛を鳴らすおまわりさんは、あるときは、やせて背の高い人のこともあれば、ときには、太って腹をつき出した赤ら顔の人のこともありました。

今日は、その太ったおまわりさんで、胸を張って、元気よく合図をしていました。

ピリッピリッと笛が鳴りました。このときと思って、二人があちらへ道を横切っていきかかると、

「おい、君。」と、おまわりさんは、後ろから、二人を呼び止めました。新吉も正二も、びっくりして、おまわりさんの方を見返りました。

「ちょっと、きたまえ。」と、おまわりさんは、大きな声でいいました。

あちらの歩道を歩いている人たちまでが立ち止まって、なんだろ

うと、こちらを見たのです。

「僕たちは、なにをしかられるようなことをしたろうか。」

二人は、顔を見合ったが、おまわりさんが手を上げて招くので、その前へいきました。その間も、おまわりさんは休まずに、ばたんばたんと機械をまわしながら、ピリッピリッと笛を鳴らしました。そして、一方からくる車は、それによって、ゴウッと走り出し、一方からくる車は、それによって、ぴたっと止まりました。

おまわりさんは、いつもここを通る二人の顔を知っているとみえて、

「いま帰るのか、おそいな。」といいました。なるほど、短い冬の太陽は、もう西にかたむきかけていました。

「撃剣のおけいこをしてきたのです。」と、正二が答えました。

「君、それで、ひとつ、この小僧を打ってくれ。」と、おまわりさんは、わきを振り向きました。二人は驚いて、そちらを見ると、かごを自転車に乗せた小僧さんが、じっとして立っていました。（きっと、合図を見ないで、走り抜けようとしたのだ。）と思いました。

「ひとつ、うんと打ってくれ。」と、おまわりさんは、今度、新吉の方に向き直っていいました。

「僕、いやです。」と、新吉は答えました。

「許しておやりよ。」と、正二が、おまわりさんの顔を見上げていったのです。

「いや、一つ打てば許してやる。それでなければ、一時間も立たせておく。」

これを聞くと、正二は、一時間も立たされるのは、かえって小僧さんを苦しめることだから、（打とうかな。）と考えました。

彼は、竹刀を持ち直して、小僧さんの方を見たのでした。早くもそれを知った新吉は、

「えいっ。」といって、正二の顔を自分の竹刀で、一つ軽くたたいて、あちらへかけ出しました。

「やったな。」と、正二は頭をおさえて、すぐに新吉の後を追いかけました。おまわりさんは、大きな腹を抱えるようにして、

「わっ、ははは。」と笑いました。止まった車から見ている人たちまで、こちらを見て笑いましたが、ピリッピリッ、ぎい、ばたんばたんと機械がまわると、もう一瞬間前のことは忘れて、みんな走り出しました。二人の少年の姿は、見えなくなってしまったのでした。そのつぎのピリッピリッを鳴らし、機械をまわすと、巡査は、

「これから気をつけろ。」と、小僧を許してやりました。小僧は、幾度も頭を下げて、ほかの車といっしょに走り去りました。

町からはなれた野原の草は、毎夜降る霜のために、黄色く枯れていました。新吉は、一人、道の上で、夕焼けのうすれた西の空をのぞんで、雪のきた、遠くの山のけしきをながめていました。すきとおるような空の色は、ちょうど冷たいガラスのように、無限にひろがっています。そして、刻々と紫色に山の姿が変わっていくのでありました。

彼は、じっと目をこらして、うす紅色の空から、二羽のはとが、いまにもぽつんと黒い点のようにあらわれて、こちらへかけてきて、だんだん大きくなるような気がしたのです。

けれど、いつまでたっても、それはむなしいのぞみであって、なつかしい影は、あらわれませんでした。

「正ちゃんのいったように、あのとき、ねこをひどいめにあわせて

やるのだったな。」

　帰らぬことを思っていると、チリチリチンと鈴の音がして、八百屋の小僧さんが、やさいを乗せて、自転車を走らせてきました。そして、新吉の前を過ぎるときに、ふと小僧さんは、こちらを向いて、かごの中から、一つ紅いりんごを取り出して、新吉の立っている足もとの草の上へ投げていきました。

　はっと思って、新吉は見送ると、小僧さんは振り返りながら、手を上げてしっけいをしました。

「あっ、さっきの小僧さんだ。小僧さん。」

　すでに自転車は遠くなって、こちらを向く顔だけが、白く見えました。新吉は、りんごを拾い上げると、にっこり笑って、その冷たい紅いくだものを自分のほおに押しあてて、あくまで、北国の畠に生まれた、高いかおりをかごうとしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「鳩とりんご」新潮社
　　1940（昭和15）年12月
初出：「日本の子供」
　　1940（昭和15）年1月
※初出時の表題は「鳩と林檎」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年9月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はととりんご

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/